



令和3年2月16日

日本税理士会連合会
会長 神津 信一 殿

全国青年税理士連盟
会長 森岡 隆



東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-21-8
代々木第10下田ビル7F
電話 03-3354-4162

「令和4年度税制改正に関する要望書」の提出について

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。日頃は当連盟の活動に深いご理解をいただき誠にありがとうございます。

さて、当連盟では国民のための租税制度の改善を目的として「あるべき租税制度」を検討し、その結果として、令和4年度税制改正に関する要望書について別紙の通り取りまとめました。

つきましては、要望書の趣旨をご理解いただき、貴会が税理士法第49条の11「税理士会は、税務行政その他租税又は税理士に関する制度について、権限のある官公署に建議し、又はその諮問に答申することができる。」の規定に基づいて、財務省、国税庁、総務省、中小企業庁等に対して行う「税制改正の建議」に際し、十分に取り入れられるよう要望します。

敬具

令和3年2月16日

令和4年度
税制改正に関する要望書

全国青年税理士連盟

目次

I	はじめに	1
II	税制に対する基本的な視点	2
III	重要税制改正要望項目	4
	【消費税】	4
	1. 消費税の複数税率制度を廃止すること（一部修正）	4
	2. 適格請求書等保存方式（いわゆるインボイス制度）を導入しないこと（一部修正）	4
	【国税通則法・納税環境整備】	5
	3. 納税者権利憲章を制定し、かつ、国税通則法の目的規定を見直すこと（継続）	5
	4. 社会保障・税番号制度の利用には慎重を期すこと（一部修正）	5
	【所得税】	5
	5. 基礎的的人的控除額を逡減・消失させないこと（一部修正）	5
	6. 年少扶養控除制度の復活及び基礎的的人的控除額を大幅に引き上げること（一部修正）	6
	【災害対応税制】	6
	7. 大規模災害時における災害税制を整備すること（新規要望）	6
	【共通事項・その他】	7
	8. 租税特別措置法を適切に改廃すること（一部修正）	7
IV	今後の税制改正についての基本的な考え方	8
V	税制改正要望項目	12
	【所得税】	12
	9. 不公平な税制を助長させるような分離課税を廃止すること（継続）	12
	10. 所得税の税率構造の見直しをより一層図ること（継続）	12
	11. 一定の所得控除を見直し又は税額控除へ移行若しくは廃止すること（継続）	12
	12. 現行の所得区分を見直すこと（継続）	13
	13. 年末調整制度を廃止すること（継続）	13
	14. 基礎的的人的控除の大幅な引上げを前提に給与所得控除を適正に見直すこと（継続）	14
	15. 基礎的的人的控除の大幅な引上げを前提に公的年金等控除を縮小すること（継続）	14

16. 親族に対する必要経費の特例等の要件を見直し、青色事業専従者給与の届出制度を廃止すること（継続）	15
17. 国外転出をする場合の譲渡所得等の特例を廃止すること（継続）	15
18. 純損失の繰戻し還付制度及び繰越控除制度を拡充すること（継続）	16
19. 青色申告承認申請書の提出期限を緩和すること（継続）	16
20. 不動産所得に係る損益通算制度の特例を廃止すること（継続）	17
21. 経済的利益に対する給与課税（FRINGE BENEFIT）の適正化を図ること（継続）	17
22. 財産債務調書の提出制度を廃止すること（継続）	17
23. 雑損控除は最後に行うこと（継続）	18
24. 非居住者に対する源泉徴収制度について、納税者の関知が困難な場合の源泉徴収義務者の保護措置を講ずること（継続）	18
25. テレワークに関する光熱費等の諸経費に係る手当を非課税とすること（新規要望）	18
26. 国外居住親族に係る扶養控除の「送金関係書類」についての要件を見直し、同一住所の扶養対象者に限り、代表者一括送金を認めること（新規要望）	19
27. 居住者が死亡した場合の確定申告書の提出期限を延長すること（新規要望）	19
28. 復興特別所得税を廃止すること（新規要望）	19
29. 医療費控除を廃止すること（新規要望）	20
【法人税】	20
30. 法人税率の安易な引下げを行わないこと（一部修正）	20
31. 役員給与について原則損金算入とすること（継続）	20
32. 繰越欠損金の使用制限を廃止し、繰越期限を無制限とすること（一部修正）	21
33. 青色申告の承認申請書の提出期限を当期の申告書の提出期限とすること（継続）	21
34. 交際費等は原則全額損金算入とすること（一部修正）	21
35. 経済実態に即した貸倒処理を認め、要件を明確化すること（継続）	22
36. 適用額明細書の添付を法人税関係特別措置の適用要件としないこと（継続）	22
37. 法人税の申告期限を各事業年度終了の日の翌日から3月以内とすること（新規要望）	23
【消費税】	23
38. 消費税率のさらなる引上げを行わないこと（継続）	23
39. 現行の消費税の納税義務の判定基準を廃止すること（継続）	23
40. 簡易課税制度を見直すこと（継続）	24
41. 「電気通信利用役務の提供」を受けた場合の仕入税額控除を認めること（継続）	24
42. 社会政策上非課税取引とされているものについて、項目を見直すこと（継続）	

.....	25
43. 仕入税額控除の要件となっている帳簿の記載要件を緩和すること（継続）	25
44. 一括比例配分方式の2年継続適用規定を廃止すること（継続）	25
45. 届出書等（簡易課税制度の選択を除く）の提出期限を前課税期間の申告書の提出 期限とすること（継続）	26
46. 総額表示義務の見直しをすること（継続）	26
【相続税】	27
47. 遺言執行費用の債務控除を認めること（一部修正）	27
48. 相続時精算課税を利用して贈与した宅地等についても小規模宅地等についての 相続税の課税価格の計算の特例を適用すること（一部修正）	28
49. 連帯納付義務を廃止すること（新規要望）	28
50. 直系尊属から結婚・子育て資金及び教育資金の一括贈与を受けた場合の贈与税 の非課税措置等は廃止すること（継続）	28
51. 役員からの借入による貸付債権の評価基準を担税力に見合った評価になるよう 新たな基準を設けること（新規要望）	29
【地方税】	29
52. 個人住民税の基礎控除額を所得税と同一にすること（継続）	29
53. 外形標準課税を中小企業に導入しないこと（継続）	29
54. 個人事業税はすべての事業を課税客体とすること（継続）	29
55. 償却資産に係る固定資産税を廃止すること（一部変更）	30
56. 事業所税を廃止すること（継続）	30
57. 個人住民税に関しても、所得税と同様な少額所得を課税対象外とする制度を創 設すること（継続）	30
58. 法人事業税及び法人住民税についても、中小法人に対する欠損金の繰戻し還付 を認めること（新規要望）	31
59. 所得税額控除の適用を受けなかった所得税等について、法人事業税においても 損金算入を認めること（新規要望）	31
【国税通則法・納税環境整備】	31
60. 提示・提出・留置きを求めることができることとする規定を削除すること（継続）	31
61. 「任意調査」においては例外なく事前通知を行うこととすること（継続）	32
62. 事前通知の際には調査の理由も併せ通知すること（継続）	32
63. 反面調査の原則禁止を明文化すること（継続）	33
64. 調査終了時に修正申告等の勧奨を行うことができることとする規定を削除する こと（継続）	33
65. 租税救済制度の検討と整備をすること（継続）	34
66. 国税犯則取締法と国税通則法は別の法律とすること（継続）	34

【共通事項・その他】	35
67. 社会保険診療報酬の所得計算の特例に関する制度を廃止すること（継続） ..	35
68. BEPS 行動計画 12「タックスプランニングの義務的開示制度」を国内におけるタックスプランニングに拡大適用しないこと（継続）	35
69. ふるさと納税について寄附金額と返礼品対価額とを明確に区分し、返礼品相当額を除外すること（継続）	35
70. 源泉所得税の納期の特例について申請時の遡及適用を認めること（継続） ..	36
71. 印紙税を廃止すること（継続）	36

《凡 例》

法令等の略称表示は、次による。

「通法」	国税通則法
「徴法」	国税徴収法
「所法」	所得税法
「法法」	法人税法
「相法」	相続税法
「消法」	消費税法
「印紙法」	印紙税法
「地方法」	地方税法
「措法」	租税特別措置法
「免法」	災害被害者に対する租税の減免、徴収猶予等に関する法律
「震災特例法」	東日本大震災の被災者等に係る国税関係法律の臨時特例に関する法律
「租特透明化法」	租税特別措置の適用状況の透明化等に関する法律
「相令」	相続税法施行令
「地方令」	地方税法施行令
「所基通」	所得税基本通達
「法基通」	法人税基本通達
「相基通」	相続税法基本通達
「番号法」	行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律
「消費税転嫁対策措法」	消費税の円滑かつ適正な転嫁の確保のための消費税の転嫁を阻害する行為の是正等に関する特別措置法
「国送金法」	内国税の適正な課税の確保を図るための国外送金等に係る調書の提出等に関する法律

Ⅰ はじめに

税理士法第1条の使命条項において、税理士は、税務に関する専門家として、申告納税制度の理念にそって、納税義務者の信頼に応えることを規定している。

税理士が、納税者の信頼に応えるには、手続面や計算面において、その手腕を振るうことは重要ではあるが、それでは個別の納税者の信頼には応えることができて、納税者全体の信頼に応えたことにはならない。納税者全体の信頼に応えるには、税理士は積極的に租税法令の構築に携わることが求められる。租税法及び租税法理論に精通した税理士の集団である税理士会に対して、いわゆる建議権（税理士法第49条の11）が付与されているのは、税理士法第1条の使命条項を確認しているからこそである。

この建議権は税理士個人に与えられているものではなく、税理士会に付与されている。そこで当該権利を有効に活用するため、日本税理士会連合会（以下、「日税連」とする）としては広く会員から意見の聴取を行ったうえで建議書の作成に当たるべきである。

当連盟は、国民主権・基本的人権・恒久平和を基盤とした憲法に定められた租税法律主義の理念に則り、納税者の権利擁護を目指して活動しており、国民のための租税制度の改善をその目的としている。また、青年税理士の団体として、わが国の将来を見据えた上で、「あるべき租税制度」の確立を目指している。日税連として関係省庁へ建議する際には本書記載の意見やその趣旨を活かされたい。

II 税制に対する基本的な視点

税を考える上で最も重要な原則は、憲法 30 条及び 84 条における租税法律主義であるが、これは主権者である国民の代表で構成される議会により決議された法律なくしては課税ができないという原則である。自ら選択した法律により自らの税額を決定するという申告納税制度のもと、納税者である国民が本当の意味で租税制度の担い手になる仕組みを構築しなければならない。

租税に関する専門家として国民から負託を受け、その制度上に建議権を有する税理士としての立場から、当連盟は本要望書の作成にあたり、「公平・中立・簡素」からの検討を基本としつつ、特に次の三つの基本的な視点を重視し、ここにその結果を表明することとした。

(1) 主権者である国民が納得できる租税制度の実現～納税者の権利擁護～

主権者である国民が納得できる租税制度を確立するためには、納税者の権利利益を保障した立法を行うことが重要である。「代表なくして課税なし」は民主主義の根幹をなすものであり、議会は常に国民の立場に立って議論を行うことが求められている。広く国民の声を税制に活かすためには、立法過程における議論が適切に開示され、国民がその議論を確認し判断できる仕組みがなければならない。たとえば、税制改正案についての解説を、公文書として国会審議前に公表すること、公聴会などを通じて意見を述べる機会を保障することなど、立法過程の透明化・可視化を法により強制し、国民が税制改正に関する意見を述べる機会を保障する仕組みを構築すべきである。

さらに、国民の理解と納得を得るためには、執行面においても、納税者の権利利益が保障されていなければならない。納税者の権利を力強く、格調高く宣言する納税者権利憲章（納税者権利基本法）を国税通則法から独立した法律として制定するとともに、国税通則法第 1 条（目的）に、「税務行政における公正の確保と透明性の向上」及び「納税者の権利利益の保護」の文言を盛り込むべきである。

(2) 公平な税制の実現～応能負担原則～

憲法 13 条（個人の尊重）、14 条（法の下での平等）、25 条（生存権）、29 条（財産権）の趣旨を税法において具体化したものが応能負担原則であり、公平な課税を実現するために税法全般において貫徹されるべき重要な原則である。

各人の担税力に応じた負担を求める租税制度の構築により、税の公平性が担保され、また、累進性の強化により租税の基本的な機能である富の再分配機能が高められ、昨今、問題となっている経済格差の是正にも繋がることになる。

しかし、現実には、政策目的により導入された租税特別措置法が、合理的理由がないまま存置され、国際競争力や経済政策を理由にした法人税率の引下げ、それに伴う財源確保を理由とした所得税の増税といった公平性の観点からは問題の多い税制改正が散見される。また、逆進性が問題となる消費税率の引き上げや全く低所得者対策にならない複数税率の導入など不公平を助長するような税制改正が進められている。公平性を蔑ろにする税制を改

め、公平性が保たれる税制に改めるべきである。

一方、近年の税制改正は、配偶者控除や基礎控除への所得制限の導入など、いたずらに税制を複雑化している改正も進められている。公平性を担保することはもちろんのこと、税制は簡素であるべきという点を十分考慮した税制に改めるべきである。

（３）未来を見据えたあるべき税制～青年税理士として～

少子高齢化、人口減少、社会保障費の増大、国家財政の悪化、さらには新型コロナウイルス感染症に伴う経済の悪化など、わが国は過去に経験したことのない様々な社会環境の変化に直面している。当連盟は青年税理士の団体として、わが国の将来を考えるにあたり、これら社会環境の大幅な変化を重要な問題として捉えている。税は国家なりという言葉もあるが、これらの問題を乗り越えるためには、取りやすいところから取ると言った近視眼的な視点ではなく、遠い未来の社会を見据えた租税制度の構築が求められている。

担税力の尺度として、一般に所得課税・資産課税・消費課税の３つが挙げられるが、消費に広く薄く負担を求める一般消費税を維持するにしても、担税力に乏しく逆進性に問題を残す消費課税を基幹税とすべきではない。税制全体を考える上では、応能負担原則を基本とした担税力に優れた所得課税を中心とし、資産課税と消費課税を適切に組み合わせることが重要である。

また、政策目的により法人税率の引下げを続けてきた結果、巨額な内部留保が法人内に蓄積されている。法人に対しても担税力に応じた負担を求めるべきであり、現在の法人税率の見直しを含めた抜本的な改革が求められる。税の公平性、富の再分配の観点から、所得課税・資産課税の一層の累進強化を目指すべきである。

III 重要税制改正要望項目

【消費税】

1. 消費税の複数税率制度を廃止すること（一部修正）

（消法 29、平成 28 改正法附則 34、地方法 72 の 82、地方法 72 の 83）

令和元年 10 月 1 日の消費税率 10%への引上げと同時に、外食・酒類を除く食料品と、一定の要件を満たした新聞について、複数税率制度が導入された。

複数税率制度は、一枚の領収書等を税率の異なるごとに分ける区分経理が必要となり、事業者に対し過重な事務負担を強いている。

また、軽減税率は低所得者より高所得者に対する恩恵が大きく、逆進性対策としての機能を果たしているとは言えない。

税制は、「公平・中立・簡素」であるべきであり、公平でも中立でも簡素でもない消費税の複数税率制度は廃止し、単一税率とすべきである。

2. 適格請求書等保存方式（いわゆるインボイス制度）を導入しないこと（一部修正）

（消法 30、57 の 2、57 の 4）

令和 5 年 10 月より適格請求書等保存方式（いわゆるインボイス制度）が採用されることとなっており、この適格請求書等を保存しなければ、事業者は仕入税額控除の適用を受けることができなくなる。

適格請求書等を発行できるのは登録をした課税事業者のみであり、現行制度における免税事業者は、適格請求書等を発行することができない。現行制度において免税事業者からの仕入等についても仕入税額控除の適用が認められている以上、その存在について抜本的な見直しをしないままこの制度を導入すれば、免税事業者が取引先から排除又は仕入税額控除ができない金額に相当する額の値引きを求められる事態が生ずることは容易に想定され、公平性を欠くこととなる。このような一部の事業者に対し不利益となるような税制はあってはならない。

適格請求書等保存方式においても、事業者の負担が軽減されることはなく、区分経理に加え、適格請求書等の記載要件の確認、不備不足等があった場合の訂正依頼等もしなければならず、事業者の事務負担は今以上に煩雑となる。

現在電子インボイスについても導入が検討されているが、中小零細企業や個人事業者については、費用面や技術面等で電子インボイスへの対応を行うことが難しいところもある。電子インボイス推進協議会から、「中小・小規模事業者が利用しやすくなるようインセンティブ等を設けること」との提言がなされているが、インセンティブを与えればよいというものではなく、そもそも経済取引について税制は中立な立場でなければならぬため、電子インボイスの導入によって、対応できない事業者が経済取引から排除されるなどといったことはあってはならない。

したがって、インボイス制度は導入すべきではなく、即刻廃止とすべきである。

【国税通則法・納税環境整備】

3. 納税者権利憲章を制定し、かつ、国税通則法の目的規定を見直すこと（継続）

（通法1）

国民主権にふさわしい税制を構築していくためには、税制及び税務行政における納税者の権利を明確に法定化する必要がある。OECD 加盟国をはじめ多くの国々では、納税者の権利を積極的に認め、法令上これを明記するとともに、納税者権利憲章等として文書化することで、納税者の協力を得て円滑な税務行政を実現するといった新しい税務行政の在り方にシフトしてきている。

そこで、納税者の権利を力強く、格調高く宣言する納税者権利憲章（納税者権利基本法）を国税通則法から独立した法律として制定するとともに、国税通則法第1条（目的）に、「税務行政における公正の確保と透明性の向上」及び「納税者の権利利益の保護に資する」の文言を盛り込むべきである。

4. 社会保障・税番号制度の利用には慎重を期すこと（一部修正）

（番号法）

平成28年1月より運用が開始された社会保障・税番号制度（いわゆるマイナンバー制度）については、事業者に対して従業員や支払調書対象者からの番号取得とともに、厳格な本人確認および厳重な安全管理措置義務などの過大な負担を押し付ける運用となっている。

マイナンバー制度については、国民がそのメリットを感じられず、他方事業者には、番号管理義務などの過大な負担を強いている。このような制度設計自体を見直し、先ず、国民が安心して利用できる環境を整える必要がある。また、事業者に対しては、現在のような厳重な管理義務を課す必要のない制度に改めるなどの対策を行う必要がある。

このような環境が整うまではその利用及び利用範囲の拡大については慎重にすべきである。

【所得税】

5. 基礎的控除額を逡減・消失させないこと（一部修正）

（所法83～86）

憲法25条は「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と定め生活最低費を課税の対象から除外することを要請している。これは、国民が健康で文化的な最低限度の生活を営むことに対して国家が介入してはならないとする生存権の法的権利性を保障するものと解すべきである。

ところで、令和2年分の所得税より、「基礎控除を合計所得金額が2,400万円を超える個人についてはその合計所得金額に応じて控除額が逡減し、合計所得金額が2,500万円を超える個人については基礎控除の適用はできないこととする」とした。また、平成30年分の

所得税より、配偶者特別控除の対象となる配偶者の合計所得金額が拡充されたが、配偶者控除及び配偶者特別控除の適用対象となる納税者本人の合計所得金額に制限が設けられた。

しかし、基礎的人的控除（基礎控除、配偶者控除、扶養控除）は最低限度の生活に必要な部分には課税を及ぼさないとする、生存権を保障するものであるから、所得の多寡にかかわらずすべての納税者が等しく控除を受けられる制度とすべきである。

所得が高いというただ一点のみをもって基礎的人的控除の逡減・消失が生じることは、国民の生存権を侵害することであり憲法に反する疑いがある。

従って、基礎的人的控除の控除額は、逡減もしくは消失してはならない。

6. 年少扶養控除制度の復活及び基礎的人的控除額を大幅に引き上げること（一部修正） （所法 83～86）

所得控除のうち、基礎的人的控除（基礎控除、配偶者控除、扶養控除）は、憲法に定める生存権に基づき、最低生活費には課税しないという考え方に基づくものである。

しかし、令和2年分の所得税より基礎控除額だけが48万円に引き上げられたが、最低生活費を充足しているとは言えない。年少扶養親族に対する扶養控除が廃止された現在、給与所得における給与所得控除や、雑所得における公的年金等控除が実質的に基礎的人的控除の不足を補っているといえるが、これらの所得のない国民に対しては生存権を保障しているとは言い難い。

従って、年少扶養親族に対する扶養控除を復活させたくうえで、基礎的人的控除の控除額を大幅に引き上げるべきである。

【災害対応税制】

7. 大規模災害時における災害税制を整備すること（新規要望）

（通法 23、46、徴法 151、153、所法 71、72、87、140、141、142、法法 57、58、80、措法 66 の 12、69 の 6、免法 4、6）

近年、我が国においては、地震、豪雨、台風などによる大規模自然災害が、毎年のように発生している状況にある。災害による損失を十分に考慮した課税を行うのはもとより、災害からの復旧、災害の予防についても、税制面からの支援が必要である。しかし、大規模災害が発生する都度、事後的に災害特例法や災害通達を制定して対処する現状の方法では迅速な対応を行うことは非常に難しいうえ、各災害に対して統一的な扱いを欠くことにもつながる。このような特例法による対応が必要最小限となるよう、少なくとも特定非常災害（新型インフルエンザ等対策特別措置法（平成24年法律第31号）第57条において読み替えて準用する特定非常災害を含む）に関する税制上の扱いを整備し、基本法として立法化し統一的な扱いができるようにすべきである。

また、下記の項目について制度の見直しをすることを要望する。

（1）【納税環境整備関係】

- ・特定非常災害に係る納税緩和制度の申請手続を簡素化し、併せて担保要件を不要とすること

(2) 【所得税関係】(要望項目 18、23 参照)

- ・特定非常災害に関する損失について、雑損控除に代わる災害損失の控除制度を創設し、災害による損失額の算定の簡素化、所得控除の順序の見直し、純損失の繰越控除及び雑損失の繰越控除期間の長期化を認めること。
- ・特定非常災害に起因する損失に限り、雑損失の繰戻し還付を認めること。

(3) 【法人税関係】

- ・特定非常災害に起因する損失については、被災前の状況に戻るために何年もかかる場合もある。現行 10 年の欠損金の繰越期間でもその損失を取り戻す期間としては不十分であるため、繰越期間を無期限とすること。また、損金算入制限の対象外とすること。
- ・特定非常災害に起因する損失に限り、白色申告法人であっても、青色申告法人と同様の繰戻し還付を認めること
- ・災害損失となる対象資産に、災害によって倒産等した債務者に対する貸付金を加えること

(4) 【相続税関係】

- ・特定非常災害により価値が下落した財産について評価の特例を定めること(相続時精算課税における受贈財産を含む)

(5) 【地方税関係】(要望項目 66 参照)

- ・個人、法人共に、事業税、住民税についての繰戻し還付制度を創設すること

(6) 【税制による特典】

- ・災害予防に関する支出について、税制による特典を付与すること

【共通事項・その他】

8. 租税特別措置法を適切に改廃すること(一部修正)

(措法 26、67、措法 70 の 2 の 2、措法 70 の 2 の 3)

現在、「経済政策」の名のもとに、数多くの政策税制措置である租税特別措置法の制定が図られており、これは特定の政策目的を達成するためのものである。だが、適用対象者や業種・規模が限定され、また、既得権益化されることにより、税負担の公平性を損ない、簡素であるべき税制をいたずらに複雑化させる要因となっている。

そこで、既存の特別措置の項目について、ゼロベースから見直し、政策目的の薄れたもの、特定の法人や個人だけに適用され不公平現象を助長するものについては、直ちに改廃し、国民に対しわかりやすい簡素な制度とすべきである。

また租税特別措置法は政策的観点から臨時性の強いものを、期限を設け、その期限までに達成することを目的として制定されているにもかかわらず、制定後、相当期間延長を繰り返している制度がある。措置法に規定されている制度のうち、利用頻度が高いなど、納税者にとって本当に必要な制度は恒久的措置とすべきであり、本法へ組み込むべきである。

IV 今後の税制改正についての基本的な考え方

憲法は、国の統治機構と基本的人権の保障を定めるが、あくまで憲法の規定の中心は人権規範にあると考えられる。人権には自由権と社会権とがある。自由権は、国家の個人領域に対する介入を排除して、個人の自由な意思決定と活動を保障する人権であり、「公権力からの自由」といわれている。社会権は、資本主義の高度化に伴って生じた失業、貧困などの弊害から社会的・経済的弱者を守るために保障された人権であり、「公権力による自由」といわれている。

租税とは、国又は地方公共団体が、その課税権に基づいて、その使用する経費に充当するために、強制的に徴収する金銭給付のことをいう。国は、租税の他にも様々な収入源を持っているが、財貨の生産と交換は原則として民間部門が担うため、国がその経費に充てる資金は大部分を租税に依存せざるを得ない。この点から、近代国家は租税国家と呼ばれる。

租税国家では、国民の平和・福祉・生活・人権なども租税の負担のあり方および用途のあり方によって基本的に決まると言える。その意味において、憲法は租税の割り当て方と使い方とに関する規範原則を規定した法典と言えなくはない。

税の問題は、財政の視点から議論されることが多いが、すべての法律は憲法の下にあり、また、本来憲法の視点から議論されなければならない。

憲法 13 条は、租税のあり方についても個人を尊重することを要請する。憲法 14 条の「法の下での平等」は租税面では能力に応じた平等を、憲法 25 条では、租税面でも「健康で文化的な最低限度の生活」の保障を要請している。憲法 29 条は、生存的財産権を基本的人権として保障するものであり、これは租税面にも妥当する。

これらを踏まえ、日本国憲法において租税立法上の法原則として導き出されるのは、能力に応じた課税、つまり応能負担原則である。

税制は公平なものでなければならない。一部の国民・事業者だけが恩恵を受けられるような制度は公平な税制とは言えない。

また、税制は中立な立場でなければならない。中立には税制が経済取引の自由を阻害してはならないという意味がある。インボイス制度のような一部の事業者が経済取引から排除される懸念がある税制は中立な制度とは言えない。

そして、税制は簡素である必要がある。簡素には、国民にとって分かり易い制度であるという意味が含まれているが、近年の税制改正は、公平性を重視しすぎ、簡素の側面が等閑にされている改正がある。

当連盟では、「公平・中立・簡素」の基本的考えの下、応能負担原則を基礎とする税制のあり方について検討を行ない、あるべき租税制度の確立に向けて要望をする。

【所得税】

応能負担原則は、高額所得層ほど高い負担を、低額所得層ほど低い負担をそれぞれの負担能力にふさわしいかたちでの課税を要求する。また、同額の所得であっても、たとえば勤労

所得（給与所得、退職所得等）と資産性所得（利子所得、配当所得、不動産所得等）とでは所得の質的担税力が異なるので、前者には低い負担を、後者には高い負担を要求する。また、回帰性所得（給与所得、事業所得等）と非回帰性所得（退職所得、一時所得等）とでは一般的に所得の質的担税力が異なるとされ、前者は後者よりも所得に安定性があるという意味では質的担税力が高いといわれる。つまり、単に所得の量的担税力だけではなく、所得の質的担税力をも考慮しなければ、憲法の意図する応能負担原則の要請に適合しない。

基礎控除額等の基礎的人的控除は、憲法 25 条を受けて、「健康で文化的な最低生活費」を課税対象から除外するという意味をもつ。課税における憲法 25 条の最低生活費保障の法的意味は、社会権として国は限られた予算の範囲内で最大限努力して生存権を保障するようにすればよいというものではなく、自由権としてその部分に課税をしないという要請である。そして、その水準は、自由主義国家にふさわしい「健康で文化的な」ものでなければならぬのであって、実際の文化的な生活費の他に納税者本人及び扶養家族の将来の生活保障のための一定の貯蓄支出分をも考慮して計算されるべきである。

【法人税】

日本の法人税（法人所得税）は、実定法制度としては所得税（個人所得税）とは別個の租税として位置づけられている。そして日本の法人税制は、法人を個人とは別個の社会的存在としてとらえている。現代社会では、法人は個人とは別個の法的主体であり、社会的、政治的、経済的にも別個の構成単位である。

憲法の命ずるところにより、税制は公平に応能負担原則に従って構築されなければならない。そのためには、所得課税や資産課税といった担税力に優れた税制に補完的に消費課税を組み合わせることが望ましいとされる。しかし、社会保障の財源不足により消費税率の引上げを国民に対し強制する状況での法人税の減税となれば、わが国の税制全体としての信頼性を損ね、さらには法人の内部留保が蓄積されやすい現状を踏まえれば、垂直的公平性への逆進性を強める結果となり、所得の再分配性の確保が難しくなる。そこで基本的な考え方である公平性、中立性を損なわない法人税制を構築すべきである。

【消費税】

消費税の税率を引き上げることでわが国の不足する財源を確保すべきだという論調がある。しかし、消費税率を引き上げると、低所得者は高所得者よりも収入に対する消費支出割合が高いため、低所得者は高所得者よりも税負担割合が大きくなってしまう。この逆進性の問題から、消費税は所得が少ない人ほど高い割合の税負担になる税制であり、応能負担原則から考えると消費税率の引上げを行うべきではない。そもそも、消費税は消費に担税力を見出し、広く薄く課税を行うために導入されたものである。これは、消費が所得とは異なり、景気状況からの影響を受けにくく、安定した財源となることを意図したものと考えられるが、上記のような逆進性の問題は応能負担原則の観点から看過しがたい。応能負担原則を最もよく実現するのは、周知のとおり所得税である。それゆえ、所得課税の税目を基幹税と位

置くべきであり、消費税は所得課税を補完するものととらえるべきである。

消費税は、理論的には、すべての事業者が課税事業者であり、段階的な税の転嫁が完全におこなわれ、最終的に消費者がすべて負担することで正しく機能する税である。現実には免税事業者、非課税取引、簡易課税制度が存在する。また非課税取引があることで段階的な税の転嫁も完全には行うことができず、そのことによる負担はすべて納税義務者である事業者が負うことになる。また、令和5年10月に導入される適格請求書保存方式により、段階的な価格転嫁を行うことがさらに難しくなり、中小零細事業者の経済的負担、事務的負担が増大することは明白である。このような消費税の持つ本質的な欠陥から生じる重要な問題が解決されなければならない。

【相続税】

相続税は、富の再分配を目的として相続による財産取得に対して課されるものである。これは、すべての財産をその価格に着目して、相続財産の価格を合算して課税している。しかし、財産には生存権的財産（一定の住宅地、住宅、現に農業の用に要している農地・農業用資産、一定の中小零細企業の事業所用地・事務所、一定の中小会社のオーナーの自社持株等）、資本的財産（大企業の事業用地等）および投機的財産（投機目的で所有する有価証券、商品としての土地、企業の買占めた土地、高級別荘地等）等の各財産が存在する。これらの財産の性質を考慮することなく課税することは、質的な担税力という観点から見た場合には大きな問題である。そこで、財産の性質に応じた評価をするなど、それぞれの財産の担税力に応じて異なった負担が求められなければならない。

【租税特別措置】

税は、公平・中立・簡素なものでなければならないという大原則の中で租税特別措置は、その例外である。社会保障あるいは景気調整といった特定の政策目的を実現するための特別な手段として用いられる。

特定の政策目的実現のために税収を減らすのであるから、国民的合意があるか、手段として税制を用いることが適当かどうかなどについて十分吟味していく必要があり、その効果と必要性を検証し、真に必要なものに限定すべきである。特に特定の産業が集中的に支援を受ける優遇措置は、可能な限り廃止・縮減し、既存産業への政策支援の偏りを是正することで、新産業が興りやすい環境を整備していく必要がある。

また、政策目的実現の手段としては、他に補助金等の直接支出がある。補助金と比較すると、補助金では納税者ごとに申請、審査、承認などの手続きがいるものの、租税特別措置では、税務申告という既存の枠組みを利用することができ、条件さえ満たせばだれでも適用を受けることができる。すなわち、租税特別措置という政策手段は、政府・税務当局、納税者双方にとって、手続き上のコストが少なく、使い勝手がよい。反面、一旦法律化されると監視が甘くなり、既得権益化しやすくなるという弊害がある。

現在の租税特別措置の多くは、特定の企業に集中しており、外資系企業や政治的利権とは

無縁の中小企業には適用されないという問題がある。法人税の高さが国際競争力を弱めるとされ、法人税の実効税率を引き下げたが、特定企業を優遇する不公平な税制が残っていると、相対的にこれらの特定企業以外の企業が不利になる点は変わらない。

租税特別措置法は税制の形をとった隠れた補助金となり、利権の巣窟となる。このままの状態では引き下げられた実効税率では経済は活性化せず、税収だけが減少するという事態になりかねない。

無用な政策税制は、税の本来の役割を阻害する。従って、既存の特別措置の項目について、ゼロベースから見直し、政策目的の薄れたもの、実情に合致しなくなったもの、不公平現象が顕著なもの、一部の法人だけに適用されるものについては、直ちに縮小又は廃止すべきである。

V 税制改正要望項目

【所得税】

9. 不公平な税制を助長させるような分離課税を廃止すること（継続）

(所法 33、69、措法 8 の 2、8 の 4、8 の 5、9 の 3、31、34、37 の 10、37 の 11 の 3、37 の 11 の 4、37 の 12 の 2、41 の 14)

所得税は担税力に応じた税負担を分かち合うという総合課税を原則としているが、分離課税での課税方法は、本来負担すべき税額が、高所得者については軽減され、逆に、低所得者については本来よりも加重される場合が生じており、総じて高所得者に有利に作用することとなる。そこで、上場株式等に係る配当所得、株式等に係る譲渡所得等、先物取引に係る雑所得等及び土地・建物等の譲渡所得に対する課税方法については、分離課税を廃止し、原則通り、総合課税とすべきである。

しかしながら、相続等により取得した父祖伝来の居住用建物及び土地等に係る不動産譲渡については、臨時所得とするなど柔軟な対応をすべきである。

10. 所得税の税率構造の見直しをより一層図ること（継続）

(所法 89、地方法 35、314 の 3)

所得税の税率は、昭和 61 年までは税率区分が 15 段階で最高税率 70%であったが、累次の税率構造の大幅な累進緩和が行われてきた。所得税は、分離課税としている金融所得などに軽減していることもあり、高所得者における所得税負担率の累進性を喪失するとともに所得格差が拡大してきている。平成 25 年度税制改正により平成 27 年より税率区分が一つ増え 7 段階に、最高税率が 5%引き上げられ 45%になったものの、課税所得 4,000 万円超の最高税率適用対象者は納税者全体の 0.1%程度と効果は限定的である。累進性の回復には、最高税率の引上げだけでなく、高い税率の適用所得を前倒しするなどのブラケット調整も含めた税率構造の見直しが不可欠である。

11. 一定の所得控除を見直し又は税額控除へ移行若しくは廃止すること（継続）

(所法 73～86)

所得控除は高所得者が低所得者より多くの恩恵を受ける逆進性の問題を抱えるほか、その内容が時代背景に合致しないものがある。

従って、時代の流れにより必要性が薄れているものについては見直し又は廃止し、税制ではなく社会保障により手当すべきものや、政策目的からなるものについては税額控除へ移行すべきである。

12. 現行の所得区分を見直すこと（継続）

（所法 23～45）

現行の所得区分は昭和 25 年に制定されたものであり、時代背景の変化に対応できていないため制度疲労を起している。

たとえば、①所得区分の区切りが曖昧なため、給与所得と事業所得、事業所得と雑所得については、課税庁と納税者との争いも多いところであり、両者の区分について、早急に、明確な定義を所得税法上定める必要があること。②実質的な担税力に差異が認めにくい所得区分については、その必要性が乏しいため整理統合すべきである。具体的には、他の所得区分に該当しないものとして一時所得と雑所得は「その他の所得」に、独立性と営利性を有するものとして不動産所得と事業所得ないし事業に類似した行為から生ずる雑所得は「事業等所得」などとして課税の適正化を図ること。③公的年金等については、計算方法が違うものをわざわざ雑所得に含める必要もないので、雑所得から公的年金等の所得を分離し、「年金所得」という新たな所得区分を定める必要があること。④市場の成熟など時代の流れから、勤労に対する所得に比べ特に富裕層に対してその恩恵が偏っているとみられる利子・配当・譲渡といった不労性所得の課税について、内容を見直すべきこと、などが挙げられる。

従って、現行の所得区分については、抜本的に見直すべきである。

13. 年末調整制度を廃止すること（継続）

（所法 190）

給与所得者は主権者たる納税者であるにも関わらず、現行の源泉徴収制度と年末調整制度によって課税関係が完結することから、納税者として不服申立ての機会がなく、本来認められている権利が阻害されている要因となっている。多くの給与所得者の納税者意識が希薄なのは、給与支払者による年末調整制度により、自己が負担する税額を意識することなく、納税事務が完結してしまうことが一因である。

また、現行制度においては、給与所得者は自身の婚姻歴や家族構成、家族の収入、健康状態に至るまで勤務先である源泉徴収義務者に報告する義務があり、その精神的負担は非常に大きく、プライバシー保護の観点からも問題がある。

さらに、平成 30 年分より配偶者控除等申告書が追加され、令和 2 年分より基礎控除申告書、所得金額調整控除申告書が追加され、控除適用の可否、控除額の判定等々の内容が年々複雑化し、給与所得者の理解が追いついておらず給与支払者が説明するのに苦慮している。

一方、昨今はいわゆるスマートフォンの普及も著しく、パソコンを含めれば給与所得者の多くはこれらの機器を使用して個々で確定申告計算が容易にできる環境が整いつつある。

従って、このように複雑化している年末調整制度は、納税者の利便性に配慮しつつ、廃止し、すべての納税者が確定申告により税額を確定させる制度とすべきである。

14. 基礎的人的控除の大幅な引上げを前提に給与所得控除を適正に見直すこと（継続）
（所法 28）

基礎的人的控除額を引き上げるべきであることは、「6. 基礎的人的控除額を大幅に引き上げること」のとおりである。

ところで、事業所得又は不動産所得等の所得は収入から実際に生じた必要経費を控除することで求められるのに対して、給与所得は法定された方法により計算した金額を必要経費として収入から控除して求められる。

給与所得控除については、その性格を「他の所得との負担調整」と「概算経費」から構成されるものと考えられることから、両者の控除としての性質、金額が妥当なものであるかを検討することが必要になる。

租税法学の定説では、給与所得は勤労性所得でありその性質上、担税力は弱く、負担調整としての控除は必要であるとされてきた。しかし、従業員のいない個人事業主にとっては、バブル崩壊以後一貫して業務単価は下がり続け、給与所得者よりも担税力が強いとは必ずしも言い切れない。今こそ給与所得と事業所得という画一的な区分での負担調整は廃止すべきである。「概算経費」について、担税力に基づいた課税を実現するためには、実際に負担した経費を控除する実額控除が原則となるべきである。そのうえで、見直した給与所得控除額との有利選択が望ましい。

15. 基礎的人的控除の大幅な引上げを前提に公的年金等控除を縮小すること（継続）
（所法 35）

基礎的人的控除額を引き上げるべきであることは、「6. 基礎的人的控除額を大幅に引き上げること」のとおりである。

ところで、公的年金に対する課税は、収入金額から公的年金等控除を控除した残額に対し課税する方式になっている。現行の公的年金等控除は、経済的稼働能力が減退する高齢者に対し、公的年金が生計維持の基盤となることを考慮して制度設計されているものである。公的年金には収入を得るために必要経費となるようなものはなく、掛金は拠出時に全額控除となっている点に鑑みれば、公的年金等控除は他の所得との負担調整という趣旨であると考えるのが妥当である。

しかしながら、公的年金等に係る税制については拠出時、運用時、給付時の課税のあり方を適切に行わなければ、過度に優遇する制度となってしまう。現行制度は拠出時に全額控除されながら、給付時にも多額の公的年金等控除の適用が受けられる仕組みになっており、公平性の観点からも見直しが必要である。また、公的年金が有する担税力という点でも、公的年金は原則的に支給が途絶えないという性質上、他の所得と比較して担税力が低いとはいえない。

従って、基礎的人的控除の大幅な引上げを前提に公的年金等控除は大幅に縮小すべきである。

16. 親族に対する必要経費の特例等の要件を見直し、青色事業専従者給与の届出制度を廃止すること（継続）

（所法 37、56、57）

（1）事業から対価を受ける親族がある場合の必要経費の特例を見直すこと

所得税法の基本は親族や家族という世帯単位課税ではなく、所得を獲得した個人ごとに課税されるのが原則である。事業から対価を受ける親族がある場合の必要経費の特例（所法 56）は、その原則から外れ適切ではない。

当該規定の適用は生計を一にする親族に対し高額な賃料を払うなど、恣意的な所得移転の防止に留めればよく、その金額が正当である場合まで否定すべき理由はない。

従って、課税公平の見地からも事業から対価を受ける親族がある場合の必要経費の特例について、記帳が適切に行われている青色申告者で、その支払方法や支払時期が適切なものについては、専従者給与（所法 57）に限定せず、すべての支払いを必要経費として認めるべきである。

（2）青色事業専従者給与について届出制度を廃止すること

また、青色事業専従者給与（所法 57）についても、事前の届出が必要とされているが、上記（1）の見直しにより、他の使用人と同様に勤務実態があり、かつ支払の事実もあれば、青色申告決算書への記載のみで、当然に青色事業専従者給与の必要経費算入を認めるべきである。つまり、青色事業専従者給与についての届出制度を廃止すべきである。

17. 国外転出をする場合の譲渡所得等の特例を廃止すること（継続）

（所法 60 の 2）

この制度（以下、「国外転出課税制度」という。）は、平成 27 年 7 月 1 日以後に国外転出をする一定の居住者が対象資産を所有している場合に、その対象資産の含み益に所得税を課税する制度である。

所得税法においては、いずれの所得についてもその収入（経済価値の流入）が所得の要素として考えられており、そこでは本来未実現の利得、つまり保有資産の価値の増加益は原則として所得の範囲から除かれている。

国外転出課税制度は、1 億円以上の有価証券等を保有する者に対して、国外転出時にそれらの資産を譲渡等したとみなして課税する制度であり、まさに未実現利得に課税するものである。未実現の利得に関しては、取引を行わないかぎり担税力の増加にあたるとはいえず、これらに課税することは、資産の換価を強制する側面もあり納税者の理解も得られない。

所得税法には第 59 条に資産の移転等があった場合のみなし課税の制度があるが、これは「所有権の移転」という事象を、課税機会と捉えている点で、明らかに制度設計が異なり、本制度の適正性を担保するものではない。

そもそもこの制度は、BEPS プロジェクト等の一環としてタックスヘイブンを利用して課

税逃れを謀る一部の者への課税の強化を行うために急場しのぎと考えられ、その制度設計は不完全と言わざるを得ない。

従って、現制度は早急に廃止して、BEPS等の租税条約等で対処すべきである。

18. 純損失の繰戻し還付制度及び繰越控除制度を拡充すること（継続）

（所法 140、142，震災特例法 6）

現在の制度では、純損失の繰戻し還付制度は青色申告者に限り認められているが、災害により事業基盤が崩壊した多くの事業者は、早期に事業を再開することが出来ない状況に置かれており特に配慮が必要である。法人については災害による損失の繰戻し還付制度がある。個人について同様の制度が設けられない理由はない。さらに、災害による損失は、その損失は多額になること、さらに、特定非常災害の場合は、被災地域の経済が回復するまでに相当の期間を要することから、繰越控除期間に制限を設けるべきではない。

従って、白色申告者についても、災害により生じた純損失のうち、少なくとも現行制度において繰越控除が認められている被災事業用資産の損失の金額等については、繰戻し還付制度の適用を認め、さらに繰越控除期間について制限を設けるべきではない。

19. 青色申告承認申請書の提出期限を緩和すること（継続）

（所法 144、166）

（1）開業年における青色申告承認申請書の提出期限を所得税の申告期限までとすること
個人事業者が、開業時において税制上の規定や届出書類の期限を熟知することは難しく、理解が無いまま税制上の優遇規定である青色申告承認申請書の提出期限を経過してしまうことが多い。

そのため、納税者に青色申告の優遇規定を与え、正しい記帳と申告を喚起するという意味から開業初年度に限り、その申請期限を開業初年度の所得税の申告期限までとすべきである。

（2）相続により事業を承継した場合の青色申告承認申請書の提出期限を、最長で相続税の申告期限までとすること

白色で申告を行っていた被相続人の事業を相続により承継した場合、相続人（その相続人がすでに青色申告に係る業務を行っていた場合を除く）の青色申告承認申請書の提出期限は、相続開始日から2ヶ月以内となっている。しかし、遺産分割協議を相続開始時から2ヶ月以内に行うことは非常に困難を要する作業である。

従って、相続という特殊な事情を考慮して、青色申告承認申請書の提出期限を相続税の申告期限までとすべきである。

20. 不動産所得に係る損益通算制度の特例を廃止すること（継続）

（措法 41 の 4）

不動産所得に損失が生じる際、土地等を取得するために生じた負債利子相当分の金額については、その損失が生じなかったものとして損益通算が認められていない。

支払利息の負担により資金が流出して課税所得が減少しているにも関わらず、損益通算を認めないということは所得がないところに課税が行われていることになり、応能負担原則の観点から問題がある。さらに施行された平成 3 年当時は、地価高騰が社会的経済に深刻な影響を及ぼしており、投機目的で不動産を借入金で取得することが資産格差の拡大を助長していた。しかし、近年土地の価格は下落傾向が続き経済状況は変化している。

法人税はすでに、平成 10 年度税制改正により新規取得土地等に係る負債利子の特例が廃止されており、法人税との公平性を保つ観点からもこの制度を廃止すべきである。

21. 経済的利益に対する給与課税（フリンジベネフィット）の適正化を図ること（継続）

（所基通 36-15～36-50）

給与所得者に対する経済的利益の非課税項目は、課税の公平性を大きく阻害している。特に社宅制度が存在する法人の従業員や公務員については、一般の相場から見るとかなり低額の家賃で住宅を賃借できることに加えて、家賃相場との差額についても課税されないという問題が生じている。

従って、いわゆる社宅の貸与による経済的利益など、特定の者への優遇措置となっているものについては、その計算方法を見直し、課税の適正化を図るべきである。

22. 財産債務調書の提出制度を廃止すること（継続）

（国送金法 5、6 の 2）

「財産債務明細書」が見直され、「財産債務調書」となり、対象者は所轄税務署長へ当該調書を提出しなければならない。この調書は、従来の明細書とは異なり、提出が必須の法定調書とされ、また、申告漏れがあったときの加算税等の 5%加重軽減措置が盛り込まれるなど、従前の財産債務明細書とは全く異なるものとして創設されている。

そもそも、我国は憲法に定められた国民主権の原理に基づいた申告納税制度を採用している。本制度は、租税法律主義により納税者自らが租税債務を確定するものであり、適正申告のために引き続き維持発展させなければならない。

課税当局が国民納税者の極めて秘匿すべき情報を得ることができるのは、あくまでも課税に必要な最小限度の情報に限定されるべきである。

従って、財産債務調書制度は廃止すべきである。その他、国外財産調書制度も同様の理由により廃止すべきである。

23. 雑損控除は最後に行うこと（継続）

（所法 87）

所得控除の順序は、繰越控除等が認められる雑損控除を最初に控除するとされているが、これでは基礎控除をはじめとした本来誰しもが認められるべき諸控除が切り捨てられる結果となってしまう。従って、所得控除の順序は、まず雑損控除以外の諸控除から行き、雑損控除は最後に行うべきである。

24. 非居住者に対する源泉徴収制度について、納税者の関知が困難な場合の源泉徴収義務者の保護措置を講ずること（継続）

（所法 212）

現在の制度では、非居住者に対して国内源泉所得の支払いをする者は、源泉徴収義務を負い、その支払い時においてその対価に対し受取人が非居住者であるかどうか、調査義務が課せられている。しかし、支払者は調査権限を有していないため、受取人が非居住者であるかについての確認の方法は限られている。そのため、課税庁の質問検査権の行使により、支払者が知り得ない情報によって受取人が非居住者であると認定し、納税告知処分がされる事例が起きている（東京高裁平成 28 年 12 月 1 日判決等）。そして、このような事例は今後ますます国際化していくわが国において増えていくことが予想される。そこで、米国における宣誓供述書制度のような減免制度を設け、源泉徴収義務者を保護する措置を講ずるべきである。

（参考）宣誓供述書制度

偽証罪の罰則の下、譲渡人が米国の納税者識別番号と、自身が非居住者でないことを示す宣誓供述書を譲受人に提出した場合には源泉徴収義務を免除する制度である。この宣誓供述書は、おそらくすべての不動産取引の日常的な閉鎖項目（routine closing item）になり、そして公務員の前で作られたすべての公証またはその他の適切な確認を必要とする（公証人役場で宣誓するようなものではないだろうか）。また、宣誓供述書を受領し源泉徴収義務者が、譲渡人の代理人または源泉徴収義務者の代理人からその宣誓供述書が虚偽である旨の通知を受けた場合でも、宣誓供述書を受領によって源泉徴収義務者が源泉徴収を免除される。（非居住者による土地等譲渡における源泉徴収制度：酒井春花）

25. テレワークに関する光熱費等の諸経費に係る手当を非課税とすること（新規要望）

（新設）

テレワークにおいては、勤務者に光熱費等の一定の支出が発生する事実がある。このような支出の多くは本来、テレワーク勤務者の勤務先等の事業者が負担すべき事業経費である。現在多くのテレワーク実施事業者では、このような支出を補填するためにテレワークに係る手当の支給が行われているが、これらの手当は給与所得として課税対象となっている。テ

レワークに係る手当の本質は、出張旅行に係る旅費日当手当支給と同様であると考えられる。

したがって、不公平の是正及び、多様な働き方の浸透を税制が阻害すべきでない観点からも、テレワークに係る手当は非課税とすべきである。

26. 国外居住親族に係る扶養控除の「送金関係書類」についての要件を見直し、同一住所の扶養対象者に限り、代表者一括送金を認めること（新規要望）

（所法 120）

国外居住親族に係る扶養控除については「代表者に一括で送金しているために各人別の送金関係書類が揃えられない」ために控除が受けられないケースがある。しかしながら、代表者への一括送金は、一般的に行われる合理的な行為であるため、以下の理由により、同一住所の扶養親族の場合に限り、一括送金の場合も認めるべきである。

- ・親族関係書類の提出で関係性や実在性は確認されていること
- ・令和 2 年度改正により令和 5 年分からの「年間支払額 38 万円以上」の要件が加わるため、支払（送金）額での判定が可能となること。

27. 居住者が死亡した場合の確定申告書の提出期限を延長すること（新規要望）

（所法 124、125、消法 45）

死亡した場合の所得税の準確定申告書は、昭和 22 年以来改正されておらず、「相続開始を知った日の翌日から 4 月を経過した日の前日まで」とされている。しかし、親族である相続人といえども被相続人の所得を正確に把握することは容易ではなく、一定の期間が必要である。また、公的年金等の源泉徴収票等、取得にも一定の期間が必要となる書類もある。

所得税の申告書作成作業は相続税申告書作成作業と並行しておこなわれる部分があること、相続税申告書の提出期限については、昭和 22 年当初は 4 月であったものが 6 月、平成 4 年改正で 10 月と延長されてきたことから、死亡した場合の準確定申告書の提出期限についても相続税の申告期限と同じ「相続の開始を知った日の翌日から 10 月以内」まで延長し、相続人の事務的・心理的負担の減少を図るべきである。

消費税法 9 条の規定により消費税の納税義務が免除される事業者以外の事業者が、課税期間の末日から申告期限までに死亡した場合及び課税期間の中途において死亡した場合の消費税の確定申告書の提出期限についても同様とすべきである。

28. 復興特別所得税を廃止すること（新規要望）

（東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法 第二節）

復興特別所得税は東日本大震災からの復興施策に必要な財源を確保するために平成 25 年 1 月 1 日から令和 19 年 12 月 31 日までの 25 年に渡り課税されるが、その対象期間に根拠

が乏しく、また、法人に対する復興税の課税は早々に終了となったにもかかわらず、所得税に対しての課税だけが残っていることについても制度としての整合性が取れていない。
したがって、復興特別所得税は廃止すべきである。

29. 医療費控除を廃止すること（新規要望）

（所法 73）

医療費控除は、シャープ勧告により、大手術や長期の入院など一定額以上の多額の医療費の支払いは納税者の担税力の減殺要因であるとして設けられた制度である。しかし今日では、高額療養費の給付制度などの社会保障制度が拡充されていること、民間の医療保険制度も充実していることなどにより、制度創設時ほどの担税力の減殺はなくなっている。
したがって、社会保障制度の拡充をより一層図ることを前提とし、医療費控除は廃止すべきである。

【法人税】

30. 法人税率の安易な引下げを行わないこと（一部修正）

（法法 66）

憲法の命ずるところにより、税制は公平に応能負担原則に従って構築されなければならない。そのためには、所得課税や資産課税や消費課税をバランス良く組み合わせることが望ましいとされる。更なる法人税の減税となれば、法人の内部留保が蓄積されやすい現状を踏まえれば、垂直的公平性への逆進性を強める結果となり、所得の再分配性の確保が難しくなる。そこで、税制における基本的な考え方である公平性、中立性を損なわないためにも、法人税率の安易な引下げは行ってはならない。

31. 役員給与について原則損金算入とすること（継続）

（法法 34）

平成 18 年度税制改正において、法人税法 34 条では本来は全額損金算入されるべき役員給与を原則損金不算入とし、定期同額給与等一定のものみの損金算入を認めるという規定に改めた。

これについては、役員報酬と役員賞与はその他の職務執行の対価と同等に扱われる会社法 361 条の規定に反し、また、企業会計基準の考え方に反するものである。また、損金算入される役員給与が限定列举とされているために、資金繰り悪化による自己の役員報酬の減額や役員の職務執行による経営改善の評価という経営上のごく当たり前の行為までもが文理解釈上は損金不算入となるといった混乱を引き起こし、種々の通達や当該規定の取り扱いに関する Q&A が出されるに至っている。このような状況はわが国が求める公平・中立・簡素な税制には、その理由又は手続きから見て程遠い状況となっている。

また、平成 18 年税制改正前に法人税法が前提としてきた「役員賞与は利益処分である」とする考え方は、役員賞与が利益処分手続きではなくなった会社法の施行により、その意味を有しなくなったと考えられる。

従って、役員給与は原則損金算入とすべきである。

32. 繰越欠損金の使用制限を廃止し、繰越期限を無制限とすること（一部修正）

（法法 57、法法 81 の 9）

大法人の欠損金の控除限度額は、平成 27 年度及び平成 28 年度税制改正により、平成 27 年 4 月から繰越控除前の所得金額の 65%相当額とされ、さらに毎年度 5%ずつの段階的な引き下げが行われて平成 30 年 4 月からは同 50%相当額と制限されることとなった。

しかしながら、欠損金の使用制限を行うことは、企業資本の維持を阻害することにもなり、利益や欠損の発生状況いかに税負担に著しい不均衡を生ずることが考えられる。

また、法人税率の引き下げが議論される一方、財政上の要請により法人の繰越欠損金の使用金額に制限を課すことは、内部留保が乏しくなった企業に税負担を課すこととなる。

従って、繰越欠損金の使用金額の制限を廃止すべきである。

また、繰越期間について、事業年度は人為的に区切られたものにすぎず、各期間を通算した所得が同じ企業でも、利益・損失の発生状況いかによって、税負担に不公平が生じるべきではないことから、帳簿の保存を要件として繰越期間は無制限とすべきである。

33. 青色申告の承認申請書の提出期限を当期の申告書の提出期限とすること（継続）

（法法 122）

青色申告制度は、帳簿書類を備え付け、簿記の原則に従った正確な帳簿書類の作成を通して、申告納税制度を普及させることを目的としているのだから、申告期限までに青色申告に必要とされる帳簿書類が整備されていれば要件を十分満たす。

現行の青色申告承認申請書の提出期限は、原則として青色申告の適用を受けようとする事業年度開始の日の前日であり、新設法人については、設立の日以後 3 月を経過した日と、新設後の最初の事業年度終了の日とのうち、いずれか早い日の前日までとされているが、上記の考えによれば、このような処置は不要である。

よって、設立初年度に限り青色申告承認申請書の提出期限を設立第 1 期の申告書の提出期限とすべきである。

34. 交際費等は原則全額損金算入とすること（一部修正）

（措法 61 の 4）

交際費は、正常な事業活動を行うために必要な支出であり、損金性を有するものである。一方で、現行の交際費等の損金不算入制度では、その支出が事業活動に必要か否かによらず、中小法人においては接待飲食費の 50%相当額または定額控除限度額を超える部分の金額

が、損金算入を認められていない。

交際費は、常にその効果が考慮されつつ支出される経費であるから、その支出が冗費となるか否かは企業の経営判断に委ねられるべきである。また、正常な事業活動に必要な費用を損金算入が認められないと、企業の健全な成長を妨げる結果となる。

企業が交際費を支出することにより、経済活動が活性化されることも考慮すれば、接待・供応・慰安・贈答の相手先等を帳簿に記載することを要件とし、その要件を満たしたものは企業規模に関わらず全額損金算入とすべきである。

35. 経済実態に即した貸倒処理を認め、要件を明確化すること（継続）

（法基通 9-6-1～3）

貸倒損失の損金算入については、実務上、「法基通 9-6-1～3」により法律上の貸倒れ、実質的な貸倒れ、形式上の貸倒れの 3 基準を斟酌しその計上時期を決定することになる。

しかし、経済活動を行う上で発生する売掛金等の貸倒れは、債務者が所在不明であったり、貸倒処理すべき時期が不明確であったりと判断に迷うケースが多い。

従って、債務者への調査や過去の回収事例を参考に経済実態に即した形で行った貸倒損失の処理やその計上時期については法人税法上もこれを認容し、その基準については通達ではなく、法人税法に明記すべきである。

36. 適用額明細書の添付を法人税関係特別措置の適用要件としないこと（継続）

（租特透明化法 3）

平成 22 年度税制改正により租特透明化法が制定され、法人税関係特別措置の適用を受けられる場合には適用額明細書を提出することが義務づけられた。この租特透明化法の「租税特別措置に関し、適用の実態を把握するための調査及びその結果の国会への報告等の措置を定めることにより、適用の状況の透明化を図るとともに、適宜、適切な見直しを推進し、もって国民が納得できる公平で透明性の高い税制の確立に寄与する」という目的については当連盟としてもその趣旨に賛同するものである。

しかし、適用額明細書の記載内容は申告書に記載されている内容を転記するものである。申告書に適用額明細書の添付がない場合や適用額明細書に虚偽記載がある場合に、その申告書に係る法人税関係特別措置の適用がないものとする規定は、租特透明化法の趣旨とは異なるものであり、「調査の結果を国会に報告するため、内容の正確性を確保することが非常に重要」であることを踏まえたとしても、その実効性を担保するための措置としては不適切である。従って、当該規定は削除すべきである。

37. 法人税の申告期限を各事業年度終了の日の翌日から3月以内とすること（新規要望）
(法法 74、消法 45)

確定申告の規定による申告書を提出すべき内国法人が、定款、寄附行為、規則、規約その他これらに準ずるもの（以下「定款等」という。）の定めにより、当該事業年度以後の各事業年度終了の日の翌日から2月以内に当該各事業年度の決算についての定時総会が招集されない常況にあると認められる場合には、納税地の所轄税務署長は、その内国法人の申請に基づき、当該事業年度以後の各事業年度の当該申告書の提出期限を1月間延長することができる」とされている。(法法 75 の 2)

現状、法人の定款等の定めで、その事業年度以後の各事業年度終了の日の翌日から3月以内にその各事業年度の決算についての定時総会が招集されるとされている事が多い現状を考えれば、法人税の申告期限は提出期限の延長の特例の適用を受けなくても、各事業年度終了の日の翌日から3月以内とすべきである。

また、消費税についても、事業年度終了の日を含む課税期間については、申告期限を現在の「課税期間の末日の翌日から2月以内」を「3月以内」とすべきである。

【消費税】

38. 消費税率のさらなる引上げを行わないこと（継続）
(消法 29、地方法 72 の 82、72 の 83)

令和元年10月1日に消費税率の引上げが行われた。

応能負担原則に従って税制を構築することが、租税の公平に最も合致するところである。しかし、消費税は、所得が少ない者ほど所得に占める消費の割合が高くなることにより生じる、いわゆる逆進性の問題があることから、消費税率を引き上げると逆進性が増大されることとなり、応能負担原則に反することになる。

また、消費税転嫁対策措置法は、消費税率の引上げにあたって、消費税の転嫁を拒否する行為等を禁止している。特定事業者（買手）は特定供給事業者（売手）に対して、減額、買ったたき等の行為を禁止しているが、これらの行為が一部の取引で行われている現実がある。消費税相当額を含めた販売価格の設定は事業者の意思によるが、消費税率が引き上げられると、特に中小事業者においては経営に重大な影響を及ぼす危険性が高く、ひいては経済の発展に支障をきたす恐れがある。

従って、消費税率について今後さらなる引上げはすべきでない。

39. 現行の消費税の納税義務の判定基準を廃止すること（継続）
(消法 2、9)

消費税は基準期間の課税売上高が1,000万円以下である者については、納税義務が免除される（特定期間における課税売上高が1,000万円を超える課税期間を除く。）が、この基

準期間による判定では、当該課税期間の売上高とは無関係に納税義務の適用の有無が判断され、現在の企業規模を反映せず極めて不合理である。

また、免税事業者は消費者が負担する消費税を納付せず、最終的に益税となる事を考慮すると、原則、すべての事業者を課税事業者とすべきであると考ええる。

そこで、当該課税期間における課税売上高が 1,000 万円以下の事業者について、配慮が必要な場合は、選択による申告不要制度を創設するとともに、原則すべての事業者を課税事業者とすべきである。

40. 簡易課税制度を見直すこと（継続）

（消法 37）

簡易課税制度は、小規模事業者の事務処理負担等を考慮して、みなし仕入率を利用した簡易な仕入控除税額の計算方法で消費税の申告ができるように導入された制度であるが、事業区分の判断が困難であり、一概に簡易的な計算方法とはいえない状況がある。また、みなし仕入率と実際の仕入率とのかい離が大きい場合もあり、益税や損税の問題も生じている。

そこで、免税点と簡易課税適用の判定基準を統一するとともに、そのうえで、消費税の本則計算が困難な零細事業者向けに事後的に簡易課税を選択できる制度を創設すべきである。なお、その際にはみなし仕入率は引き下げるべきである。

41. 「電気通信利用役務の提供」を受けた場合の仕入税額控除を認めること（継続）

（消法 2）

登録国外事業者以外の国外事業者から提供を受けた、「事業者向け電気通信利用役務の提供」以外の「電気通信利用役務の提供」を受けた場合の仕入税額控除を認めるべきである。

平成 27 年 10 月 1 日以降、電気通信利用役務の提供に係る内外判定基準が見直され、その役務の提供が国内取引に該当するかどうかの判定基準が、役務の提供を行う者の役務の提供に係る事務所等の所在地から役務の提供を受ける者の住所等に改正された。国外事業者が国内向けに行う「電気通信利用役務の提供」は国内取引に該当することになり、消費税の納税義務が生じることとなった。これにより、「事業者向け電気通信利用役務の提供」以外のものについては、国外事業者が納税義務者となり、日本の税務署に申告・納税を行うこととなった。しかし、国外事業者のうち登録国外事業者でない者から「事業者向け電気通信利用役務の提供」以外の「電気通信利用役務の提供」を受けた場合には、国内取引として消費税が課税されるにもかかわらず、経過措置により、当分の間、当該役務の提供に係る課税仕入れについて仕入税額控除を制限されることとなった。

この制限は、登録国外事業者以外の国外事業者が消費税相当額を上乗せしておきながら、実際に消費税を納税するか不透明なために、その税額を確保するための措置と考えられる。しかし、これは徴収の問題であり、その負担を仕入れ税額控除を制限することで仕入れ側に強いる、いわば皺寄せを仕入れ側に被せるようなことになっている。

従って、このような措置は廃止し、仕入税額控除を認めるべきである。

また、必要であれば、インターネットを介した取引は、相手先が国外事業者にあたるか判断し難いことから、課税上の判定を事業者に表示させることを義務化する等の措置を講ずるべきである。

42. 社会政策上非課税取引とされているものについて、項目を見直すこと（継続）

（消法 6）

非課税取引については、課税売上割合の計算上、課税資産の譲渡等に算入しないことから、非課税売上に対応する仕入に係る消費税を事実上事業者が負担することになっている。その結果として、前段階における仕入税額部分については消費者への価格転嫁が行われ、社会政策上の配慮に基づく非課税という本来の趣旨が達成されないという本末転倒な結果となっている。

このような不合理がないように、特に社会政策的配慮に基づく非課税取引の項目については、原則消費税の課税取引とすべきである。

43. 仕入税額控除の要件となっている帳簿の記載要件を緩和すること（継続）

（消法 30）

仕入税額控除の要件は、帳簿に一定事項を記載し、その記載要件を満たした帳簿および請求書等を保存すべきこととされている。帳簿の記載事項は請求書の記載内容と重複する部分が多く、保存されている請求書等により仕入税額控除の要件となる事項が確認できるのであれば、帳簿に同内容を記載させる意味はなく、消費税事務を行う事業者に無意味な事務負担を強いる必要はない。重複事項を省略して記載した帳簿であっても、請求書等の保存により仕入税額控除の要件となる事項の立証ができるのであれば、これを認めるべきである。

消費税の導入当初は、制度定着までは帳簿に必要事項を記載させることに一定の意義があったのかもしれないが、導入から年数が経過し会計システムも当時より普及定着している。

以上のことから、仕入税額控除については請求書等の保存を要件とし、事務負担を考慮し適切に請求書を保存している場合には、重複事項となっている帳簿の記載要件を緩和すべきである。

44. 一括比例配分方式の2年継続適用規定を廃止すること（継続）

（消法 30）

仕入税額控除を計算する場合には、個別対応方式と一括比例配分方式の選択が認められているが、一括比例配分方式を一旦選択した場合には、2年間継続適用した後でなければ、個別対応方式を選択することができないことになっている。これは個別対応方式の採用が可能な事業者であっても事務的簡便性の採用の方途を可能にしておくとともに、一括比例

配分方式が個別対応方式に比較して有利となる場合も起こり得るとの配慮に基づくものと考えられる。

本来はすべての事業者が個別対応方式によるべきではあるが、実際には事務負担に配慮するといった形で比例配分方式を認めたために、損税と益税が同時に発生する制度的矛盾をかかえることとなった。平成 23 年度税制改正により仕入税額控除における、いわゆる「95%ルール」の適用要件が見直され、事業者によっては、個別対応方式により仕入税額控除の計算をしたいところ、事務の煩雑さ等からやむを得ず当初は一括比例配分方式を選択するケースも想定される。しかし、現行制度では、このような事業者が翌課税期間において個別対応方式を選択しようとしても一括比例配分方式が強制されることになってしまう。その結果、税負担が過大になり事業者にとっての負担を発生させるといった問題が生じるという不合理がある。

また、原則的な仕入税額控除計算の方法が個別対応方式であることを考慮すると、簡便的な計算方法である一括比例配分方式に対して2年縛りすることは妥当ではない。

従って、このような不合理を改善するため、一括比例配分方式の2年継続適用規定は廃止するべきである。

45. 届出書等（簡易課税制度の選択を除く）の提出期限を前課税期間の申告書の提出期限とすること（継続）

消費税の届出書等の提出期限は、当該課税期間開始の日の前日までとなっている。

現行法では、届出書の提出期限は前課税期間の申告書の提出期限より2ヶ月（申告期限の延長をしている場合は3ヶ月）前に到来する。そのため、前課税期間の確定した申告書に基づいて届出書を提出したくても、提出するタイミングを逸して届出書の適用を受けられない、もしくは、前課税期間の申告書が確定しないまま、適切な判断ができない状況下で届出書を提出せざるを得ない、といった税務上の判断において困難な問題が生じている。従って、消費税の届出書等の提出期限は、前課税期間の申告書の提出期限とすべきである。

46. 総額表示義務の見直しをすること（継続）

（消法 63、消費税転嫁対策措法 10）

消費税転嫁対策特別措置法が成立し、平成 16 年 4 月 1 日以降において義務付けられてきた総額表示が一時的に緩和されることとなった。この緩和は、二度にわたる消費税率の引き上げに際し、消費税の円滑かつ適正な転嫁の確保及び事業者による値札の貼り替え等の事務負担に配慮する観点から実施されている。

諸外国の例を見ると、EU 各国においては総額表示が義務づけられている。しかし、その理由は、総額表示が制度的に優れているからではなく、付加価値税の長い歴史の中で消費税を価格形成要因であるコストの一つと考える文化が形成されてきたからである。

わが国においては、「消費者の利便性に配慮する観点」及び「消費税に対する国民の理解を深める観点」から消費税の総額表示義務が導入されたが、以下の理由から総額表示義務の見直しをすることを提言する。

第一に、事業者の消費税の価格転嫁が容易になること。総額表示義務の一時的な緩和は、消費税の円滑かつ適正な転嫁の確保を目的としており、総額表示義務は事業者が消費税を円滑かつ適正に転嫁する際の障害になるという考えが十分に認識されている。

第二に、価格表示は事業者の自由であるべきこと。事業者にとって、価格表示は事業上非常に重要であり、税法が制限すべきものではない。誤認防止措置を講じた上で、価格表示に自由を与える今回の緩和策で十分である。

第三に、総額表示を義務づける理由が乏しいこと。前述の通り、総額表示義務は、「消費者の利便性に配慮する観点」及び「消費税に対する国民の理解を深める観点」から導入された。しかしながら、誤認防止措置で消費者の利便性は十分に確保される。また、消費税の総額表示義務を見直し、消費税額を日常的に意識することを通じて、消費税に対する理解が深まるとも考えられる。いずれも、法律で事業者の自由を制限するほどの理由とは考えられない。

以上のことから、消費税導入から時間が経過し、価格表示の税込・税抜きの誤認を理由に総額表示を強制することは根拠としてはすでに薄いと考えられる。複数税率の導入により、税込価格をもって取引価格とする消費者の感覚は高まると考えられるが、価格表示については誤認防止措置さえ担保できれば税制で定めることをせず、事業者が任意に表示方法を選択できるように見直すべきである。

ゆえに、税制で定める必要があるとするならば、誤認防止措置のみである。

【相続税】

47. 遺言執行費用の債務控除を認めること（一部修正）

（相法 13、14）

遺言執行費用は、相続開始の際現に存する債務には該当せず、相続人等が負担すべき費用とされるため、債務控除が認められていない。しかし、被相続人の純財産に対し課税を行うという債務控除の趣旨に鑑みると、相続開始に伴い必然的に発生し、遺言という被相続人の生前の意思に基づく遺言執行費用は、相続財産から控除すべきものである。民法 1021 条で「遺言の執行に関する費用は、相続財産の負担とする」と規定されていることから、申告期限までに金額が確定した遺言執行費用については、債務控除を認めるべきである。

48. 相続時精算課税を利用して贈与した宅地等についても小規模宅地等についての相続税の課税価格の計算の特例を適用すること（一部修正）

（相法 21 の 9～21 の 18、措法 69 の 4）

相続時精算課税制度は、若い世代への財産移転を促進し経済を活性化させることを目的に創設された制度である。

小規模宅地等の特例は、被相続人が居住又は事業の用に供していた土地等を承継した相続人等の生計を維持するために課税を軽減することを企図した制度である。

相続時精算課税制度を摘要して被相続人の生前に贈与により取得した土地等であっても、当該土地等が相続開始時において小規模宅地等の特例の対象となる宅地等に該当する場合には、両制度の趣旨に鑑み、小規模宅地等の特例の適用を認めるべきである。

49. 連帯納付義務を廃止すること（新規要望）

（相法 34）

連帯納付義務は、旧民法の家督相続制から来ている財産課税方式の流れをくむ制度であり、同一の被相続人から相続又は遺贈により財産を取得したすべての者が共同して相続税を納付する義務を負う制度である。

しかし、本来自己の納税義務を完了した相続人の他に共同相続人の相続税の納付義務を負わせることは、納税義務を完了した相続人の担税力を超えて税負担を負わせることになり、応能負担原則に反する。

また、相続税の申告期限から 5 年間、連帯納付義務を負う共同相続人は法的かつ経済的に不安定な状況に置かれることになる。

従って、相法 34 条の連帯納付義務は廃止するべきである。

50. 直系尊属から結婚・子育て資金及び教育資金の一括贈与を受けた場合の贈与税の非課税措置等は廃止すること（継続）

（措法 70 条の 2 の 2、70 条の 2 の 3）

高齢者世代が保有する金融資産の現役世代への移転促進を目的として創設された制度であるが、「教育資金贈与制度」の恩恵を最大限に享受できるのは、まとまった金銭を保有し、孫等の教育資金に充てることのできる富裕層だけである。格差の拡大が社会問題化している中、資産を保有する者とそうでない者の格差の固定を助長してしまう。また、応能負担原則の観点からは税の持つ所得等の再分配機能を回復させることが検討されるべきであるところ、「教育資金贈与制度」はそれに逆行する措置であり、祖父母・親世代の資力によって子・孫世代の教育水準に格差が生じる弊害を助長するものである。そこで、このような富裕層だけに優遇を与えるといった不公平税制は即刻廃止すべきである。また、「結婚・子育て資金の一括贈与に係る贈与税の非課税措置」についても同様に、廃止すべきである。

51. 役員からの借入による貸付債権の評価基準を担税力に見合った評価になるよう新たな基準を設けること（新規要望）

被相続人が株主であった法人に対して自ら貸し付けた債権は、相続財産として原則元本により評価される。社歴等の長い中小企業においては役員からの借入金が高額になり、実質的に回収不能である場合が多い。債権の回収不能部分に相続税を課税することは、時価評価を規定している相続税法第 22 条に違反する。

従って、担税力に見合った客観的な評価基準を明確に定めるべきである。

【地方税】

52. 個人住民税の基礎控除額を所得税と同一にすること（継続）

（地方法 34、314 の 2）

所得税と個人住民税は、原則同一の課税標準である所得を課税対象としており、所得税の申告が事実上、個人住民税申告の基礎となっている。しかし、住民税を計算する上での基礎控除額は所得税の基礎控除額よりさらに低い水準となっており、ただでさえ低すぎる基礎控除額をさらに引き下げる結果となっている。

課税最低限非課税という憲法上の見地から、両者の基礎控除額は一致させるべきである。

53. 外形標準課税を中小企業に導入しないこと（継続）

（地方法 72 の 2）

事業税の外形標準課税は、事業に対する応益課税としての事業税の性格の明確化、事業規模に応じた薄く広く公平な税負担の確保、安定的な行政サービスの提供のための税収の安定的確保を目的に、資本金の額 1 億円超の法人に対して導入された。また、政府税制調査会では、中小企業に対する外形標準課税の導入が検討された経緯がある。

しかしながら、現在の外形標準課税における外形基準となる課税標準のうち付加価値割については、大企業に比べ労働集約型となりやすい中小企業においては人件費率が高くなりやすいことから、その事業規模を適切に表しているとはいえない。このような事業規模を適切に表していない課税標準に基づく外形標準課税を中小企業に導入することは、担税力に乏しい中小企業の経営を圧迫し、さらには中小企業の雇用確保の問題にも影響を及ぼすこととなる。

従って、中小企業に対しては外形標準課税を導入すべきではない。

54. 個人事業税はすべての事業を課税客体とすること（継続）

（地方法 72 の 2）

個人事業税の課税客体は、第一種事業から第三種事業が法定列挙されている。プロスポーツ選手など事業性があるにもかかわらず法定列挙されていないため特定の事業には課税さ

れていない。また、YouTuber など就業形態の多様化などに伴い課税対象事業の認定に困難を極めている実態がある。さらに、社会保険診療報酬に係る所得については課税除外されているなど課税の公平性が損なわれている。

事業税は、事業活動を行うに伴い地方自治体の各種サービスを受益しているため、課税標準は事業の所得であるものの、事業に課税する収益税とされている。事業活動を通じて地方自治体の各種サービスを受取る事業については事業を特定する必要はない。

従って、事業税の課税客体は法定列举するのではなく、すべての事業を課税客体とし、特定の事業を課税除外すべきでない。

55. 償却資産に係る固定資産税を廃止すること（一部変更）

（地方法 341、349 の 2、394、地方令 49）

償却資産に係る固定資産税は、事業に最低限必要な事務机、椅子、電子計算機、複写機をはじめ、機械装置などの事業用固定資産に幅広く課税されているものであるため、設備型産業に多くの税負担を強いることになり、公平ではない。また、償却資産に係る固定資産税は企業の設備投資意欲を低下させる一因となっている。加えて、償却資産の課税客体となる固定資産と、法人税及び所得税における固定資産の範囲が相違しているため、納税義務者における事務負担が煩雑になっている。

従って、償却資産に係る固定資産税は廃止すべきである。

56. 事業所税を廃止すること（継続）

（地方法 701 の 30）

事業所税は、都市環境の整備及び改善に関する事業に要する費用に充てるために指定都市のみが徴収できる地方税である。そのため、昨今の市町村合併が推進されたことにおいて、指定都市に合併された場合、事業主は自己の意思に反し予定外の税負担を強いられることになる。また、人口 30 万人以上の都市に適用されていることにより、人口 30 万人未満の市町村との不公平が生じている。

さらに、事業所税は、事業活動と行政サービスとの受益関係に着目し課税されているといわれるが、住民税均等割額、固定資産税などの市税や事業税をはじめとする他の都道府県民税と二重課税になっているとの指摘がある。

これらのことを考慮して、事業所税は廃止すべきである。

57. 個人住民税に関しても、所得税と同様な少額所得を課税対象外とする制度を創設すること（継続）

（新設）

所得税においては、従前より給与所得者について、給与以外の所得が一定額以下の者を申告不要とする制度が設けられている。また、平成 23 年分の所得税から公的年金収入者にも、

少額所得申告不要制度が導入された。しかし、所得税について申告書を提出しなかった者についても、個人住民税について申告書の提出が必要になる場合がある。

従って、個人住民税の課税に際しては、その大半を所得税の情報を基礎としている以上、このような取扱いの相違による納税者の混乱の防止、事務負担の軽減などの観点から個人住民税においても所得税と同様に少額所得を課税対象外とする制度を創設すべきである。

58. 法人事業税及び法人住民税についても、中小法人に対する欠損金の繰戻し還付を認めること（新規要望）

（新設）

国税において欠損金の繰戻し還付の適用を受けた場合であっても、地方税においては、その適用を受けることができない。すなわち、法人事業税は欠損金の繰越控除、法人住民税は翌期以降での税額控除となり、不測の事態により多大な損失を被った場合であっても、既に納付済となった地方税を繰戻すすべは無い。中小法人の脆弱な財務基盤を鑑みれば、これを認めるべきである。

59. 所得税額控除の適用を受けなかった所得税等について、法人事業税においても損金算入を認めること（新規要望）

（地方令 21 の 2 の 2）

所得税額控除の適用を受けなかった所得税額等について、法人税においては損金算入が認められるところ、法人事業税においては損金算入が認められていない。税制は、公平・中立・簡素であるべきところ、この扱いを異にする合理的かつ明確な理由は見受けられない。よって、法人事業税についても損金算入を認めるべきである。

【国税通則法・納税環境整備】

60. 提示・提出・留置きを求められることができることとする規定を削除すること（継続）

（通法 74 の 2～74 の 7、127）

税務職員による物件の提示又は提出の要求に対し、正当な理由がなくこれに応じなかった場合に罰則を科すとされていることは、納税者の同意と協力が前提である任意調査の領域を超えた課税庁の権限強化である。調査を受忍する納税者の精神的負担を従前以上に増すものであり、これまでの慣行を法定化するという法改正の趣旨を逸脱したものであるといわざるを得ない。さらに、提出された物件を留置く規定が新たに創設されたが、納税者の同意や協力を得ないに行えないものであることが法定化されておらず、運営上は「承諾なく強制的に留め置くことはありません。」（税務調査手続に関する FAQ（一般納税者向け））としているもののその法的根拠は薄い。

従って、物件の提示・提出を求められることができることとする規定および物件の留置が出来ること

する規定については削除すべきである。

61. 「任意調査」においては例外なく事前通知を行うこととすること（継続）

(通法 74 の 9、74 の 10)

平成 23 年度の国税通則法改正により、税務調査の際には原則として事前通知が行われることになったが、例外として課税庁の裁量により事前通知を行わないことができる取扱いが既存の内部通達（平 13. 3. 27 「税務調査の際の事前通知について（事務運営指針）」）を踏襲する形でそのまま法令化され、その例外事由については具体例を通達に記載することとされている。

しかし、犯則事件に係る質問・検査・領置権等の行使（いわゆる強制調査）とは異なり、質問・検査権の行使（いわゆる任意調査）は、法令上もわざわざ「犯罪捜査のために認められたものと解してはならない」と釘を刺しているように、法令違反の取り締まりが目的ではなく、あくまでも納税者の申告内容等が正しいものであるかどうかの確認をするために行われるものである。

このことから、脱税等の嫌疑があるのであれば、犯則調査手続きによる強制調査をすれば良いのであって、それ以外の任意調査の場合は、例外なく事前通知を行うことに改正すべきである。また、事前通知しない例外規定が定められたが、少なくとも例外事由については単に通達に例示するのではなく、厳格な要件を定めた上で法令に限定列挙すべきであるし、納税者の権利を不当に侵害しないよう、代理人の選任及び立会を求める権利、及びその権利に関する教示を受ける権利を納税者に付与することを法律に明記し、その告知に関する手続を整備すべきである。

62. 事前通知の際には調査の理由も併せ通知すること（継続）

(通法 74 の 9)

国税通則法では「通知内容」には「調査の理由」が含まれていない。

しかし、税務調査はすべての納税者に対し一律に行われるわけではない。主権者たる納税者が申告納税制度に基づき第一義的に確定させた申告納税額等をわざわざ税務調査によって確認するのであるから、そこには税務行政の効率化や徴税コストなども考慮した上で、なおかつ、調査対象に選定されるだけの何らかの理由があるはずであるし、そうでなければならぬ。

従って、単に調査の目的や調査物件を通知するだけでは不十分であり、何故、その納税者について税務調査を行うのかという調査の必要性が理解できる合理的で具体的な調査理由の開示がされるべきである。

63. 反面調査の原則禁止を明文化すること（継続）

反面調査については法令上に何ら制限をする規定がない。わずかに法令上の根拠の弱い、一般の納税者向けの質疑応答集（FAQ）である「税務調査手続に関する FAQ（一般納税者向け）」において、「いわゆる反面調査の場合には、事前通知に関する法令上の規定はありませんが、運用上、原則として、あらかじめその対象者の方へ連絡を行うこととしています。」とされているものの、事前通知なしで不当な反面調査があっても、納税者は対抗できない不安定な状態に置かれている。

また、反面調査は修正申告等の勧奨の道具に使われる場合があり、納税者の権利を不当に侵害する行為を助長する危険性があるほか、申告納税制度の趣旨に鑑みれば本来はこれを禁止又は制限する規定が法令上に整備されていなければならない。

従って、反面調査に関しては原則禁止とすべきであり、やむを得ない事由がある場合に限り、納税者に事前通知をし、納税者の同意を得て、納税者の協力あるいは立会いのもとで行うべきである。そして、このような手続を国税通則法に定めるべきである。

また、その事由についても法律に限定列挙することによって要件を明確化し課税庁の裁量に制限をかけるとともに、納税者（反面先を含む）の権利を不当に侵害しないよう配慮すべきである。

64. 調査終了時に修正申告等の勧奨を行うことができることとする規定を削除すること（継続）

（通法 74 の 11）

調査終了時に更正決定等をすべきと認める場合には、税務職員は修正申告又は期限後申告の勧奨を行うことができるとされており、また、「税務調査手続に関する FAQ（一般納税者向け）」には、「原則として、修正申告（又は期限後申告）を勧奨することとしています。」としている。

しかし、納税者の不服申立ての機会を不当に奪うことになりかねない修正申告等については、たとえその得失について説明がされたとしても、税務職員が勧奨するようなことはあってはならない。むしろ、申告納税制度の下では、修正申告等をするか、更正決定等の手続きを選ぶかは、納税者が自主的に判断すべきものであり、税務職員はその選択を特定の方向に仕向けるような行為をすべきではなく、あくまで判断に資する情報を提供するにとどめるべきである。

従って、調査終了に修正申告等の勧奨を行うことができることとする規定を削除すべきである。

65. 租税救済制度の検討と整備をすること（継続）

（通法 75～116）

租税に関する権利救済制度については、納税者主権の観点から、救済を得るための負担を極力軽減するよう配慮された制度でなければならない。また、一般的な納税義務者だけでなく、連帯納付義務者や第二次納税義務者あるいは滞納者などの権利保護法制、権利救済制度についてもさらなる検討と整備がされるべきである。

不服申立の審査機関である国税不服審判所については、組織・人事その他納税者の権利救済に影響を及ぼすあらゆる関係において税務行政庁からは独立した存在でなければならない。第三者性の確立が図られなければならない。具体的には、組織を内閣府下に設置すること、機能の細分化・専門化、国税通則法 78 条（国税庁長官による審判所長の任命）の規定の改組、税務行政機関との人事交流の禁止、審判官の公募任用の拡大、審判官の人材育成措置などが推進されなければならない。

また、このことは訴訟段階においても妥当する。すなわち、第三者性の確立のために裁判所に対する国税庁派遣の裁判所調査官制度を廃止すべきであるし、機能の細分化・専門化のためにはすべての裁判所に租税訴訟専門担当部を設置するか、租税専門裁判所（タックスコート）設置の検討などが必要である。さらに言えば、出訴費用等への配慮の一環として、少額訴訟専門機関の設置等の検討もすべきである。

66. 国税犯則取締法と国税通則法は別の法律とすること（継続）

国税通則法は国税に関する手続きを一つの法律にまとめ、国税に関する基本的、共通的な事項を手続法としての基本法として定められた法律であり、「国民の納税義務の適正かつ円滑な履行に資すること」を目的とする。一方、国税犯則取締法は犯則調査手続きとして、脱税事件を検察官に告発して刑事訴追を求めることを主たる目的として定められた法律であり、強制調査の根拠法である。これらの法律は立法の目的が全く異なる。

課税調査と犯則調査を同一の法律に規定することによって一覧性が高まり、納税者にとっても分かりやすい法体系となるために、国税犯則取締法を国税通則法に編入したと説明されている。しかし、犯則調査と適正な課税を行うための課税調査とは対象となる調査や性質に違いがあるにもかかわらず、課税庁の捜査権限を強化した上で国税通則法に編入し、これらを同一の法律にすることは、国民にとって、分かりにくいこととなるうえ、強制調査と任意調査の境があいまいになるだけでなく、国税通則法が納税者の権利利益の保障よりも課税庁の権限を優先したものとなったと言える。

従って、国税犯則取締法と国税通則法は別の法律にすべきである。

【共通事項・その他】

67. 社会保険診療報酬の所得計算の特例に関する制度を廃止すること（継続）

一定の個人医院を営む医師等又は医療法人については、概算経費率を用いる「社会保険診療報酬の所得計算の特例制度」が設けられているが、これは国民皆保険制度の定着のための政治的な判断に税制が配慮したことと端を発して設けられた制度であり、当初の目的は既に達成されているものと考えられる。すでに制度自体、その考え方は社会的経済的素地を失っていると言える。また正確な記帳制度に基づく所得計算が原則であり、課税の公平の見地からもこの特例は廃止すべきである。

68. BEPS 行動計画 12「タックスプランニングの義務的開示制度」を国内におけるタックスプランニングに拡大適用しないこと（継続）

平成 29 年度の税制調査会において義務的開示制度の制度設計における項目ごとのオプション・勧告として制度の大まかな概要が説明されているが、OECD が BEPS プロジェクトを立ち上げた趣旨は、グローバル化に伴うビジネスモデルの構造変化により生じた多国籍企業の活動実態と各国の税制や国際課税ルールとのずれを利用することで、多国籍企業がその課税所得を人為的に操作し、課税逃れを行っている問題（BEPS）に対処することである。当然のことながら、開示制度の適用範囲は国際的な租税回避策に限定されるべきであるが、この説明においては、自身がスキームの一因であり、自国に重大な税務上の影響が及ぶ場合に開示義務が発生するとされており、自身がスキームの一因であれば国内取引であっても開示義務に該当するような表現となっており、国際取引に限定されていない。

よって、プロジェクトの趣旨を逸脱しないように、国内における適法なタックスプランニングにまで義務的開示制度を拡大適用しないようにするべきである。

69. ふるさと納税について寄附金額と返礼品対価額とを明確に区分し、返礼品相当額を除外すること（継続）

(所法 78、地方法 37 条の 2、314 条の 7)

ふるさと納税導入の意義は、①税の使われ方への意識を高めること、②住所地以外の地域支援ができること、③各自治体が自らの特産を見出し、競争を生み出すことであった。

高所得者ほど寄附金控除額が大きくなることは反射作用の一つであるが、控除額に比例して返礼品の対価が多額になることは過剰な優遇といえるため、寄附金控除額の計算においては、寄附金額と返礼品相当額（消費税等・送料等含む）とを明確に区分し、返礼品相当額を寄附金控除及び住民税控除の対象から除外すべきである。

70. 源泉所得税の納期の特例について申請時の遡及適用を認めること（継続）

（所法 183、216、217）

源泉所得税に係る納期の特例は、その申請書を提出した月の翌月末日までに税務署長から承認又は却下の通知がなければ、その申請書を提出した月の翌月末日に承認があったものとされ、その申請の翌々月の納付分からこの特例が適用されることになっている。そのため、新設と同時に申請してもその月は適用されないことになる。しかし、多くの中小零細企業では、設立当初は税制に関して十分な知識が無く、設立時は多忙な時期でもある。そのため、源泉所得税の納期を逸し遅延するケースが多々見受けられる。

従って、納期の特例の承認に関する申請については、開業の日又は設立の日から一定期間内にその申請をした場合にはその申請した月からその開業の日又は設立の日の属する月まで遡及して適用する制度と改めるべきである。

71. 印紙税を廃止すること（継続）

（印紙法）

印紙税は経済取引の上で発生する経済的利益が表現された課税文書に課税することとしているが、電子媒体を利用した商取引の増加やペーパーレス化により課税文書として印紙税を課す根拠が不明確・不合理となっている。

また、電子媒体を利用した商取引化が進む大規模法人与電子化が普及していない中小零細企業で印紙税の負担に不公平が出ている。

従って、このような不合理を是正するために印紙税を廃止するべきである。

令和4年度税制改正に関する要望書

全国青年税理士連盟 法対策部

法対策部長 富川 和将 (近畿青年税理士連盟・近畿税理士会所属)

税制対策委員長 高柳 律彦 (神奈川青年税理士クラブ・東京地方税理士会所属)

法対策部部員一同

全国青年税理士連盟

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-21-8 代々木第10 下田ビル 7F

電話 03-3354-4162 FAX 03-3354-4095
